

宗教と寛容（一）

—— 宗教の真理と宗教者の態度 ——

小 畑 進

第1章 キリスト教《非寛容》論 ……………	34
(1) 鯖田豊之の「肉食の思想」 ……………	36
(2) 玉城康四郎の「ヨーロッパの佛教」 ……	38
(3) 竹山道雄の「聖書とガス室」 ……………	40
第2章 佛典と聖書の《寛容》論 ……………	43
(1) 佛陀のことば《スッタ・ニパータ》 ……	43
(2) キリストおよびパウロのことば ……………	46

(二) に続く

第1章 キリスト教《非寛容》論

キリスト教は排他的で狭量、他の諸宗教を排斥して、おのれのみを是とする。その特性は独断・専横・独善・圧制的である—こんな誹謗ひぼうの聲が聞こえます。それにひきかえ我が日本古来の宗教は、として、神道も佛教も、寛容・融和の精神に立ち、他の宗教と重層的に並存することを苦とせず、西洋的な《異端ヘレシエ》と言った概念などはない—こんな自讃の聲も聞こえます。そして、これは我が日本のみか広く東洋一般の特徴であって、佛教思想の故郷たるインドでは、アショカ王も、カーラベーラ王も、諸宗教の融和をおこない、近代インドの改革者ラマクリシュナは、

「すべての宗教は異なった道を通して、同じ神に向かうということを、私は知った」と発言しており、第一、インドでは宗教的対立抗争の事例は、ほとんど見あたらなかったのである。云々。

しかるに見よ、キリスト教的西洋世界は、恐るべき宗教闘争の巷^{ちまた}であったではないか。それもまた、排他的・非寛容なるキリスト教精神のしからしむるところであった、と。新大陸に上陸したコルテスはアステカ王クワテモクを、ピサロはインカ皇帝アタワルパを、威嚇・脅迫してカトリックに改宗せしめたかと思うと、これを処刑したではないか。さらに見よ、六百万人を“屠殺”したナチスのユダヤ人虐殺を。それらも、実は……として、キリスト教があわれな恰好で引き合いに出されます。そのエスカレートぶりは、いよいよキリスト教をもって非寛容・残忍の元兇・怪物とするに効果があります。それに対して、わが佛教は、わが神道は、そして、我れら東洋は、日本人は一として、寛容・融和の太平楽が奏でられるのです。

思い出せば、戦時中に、ナイフやフォークで食事をする西洋人は野卑で、残忍であるが、箸^{はし}で食事をする日本人は上品で、優雅であるとする、きわめてもっともらしい言い分がありました。曰く、ナイフは猛獣の牙にあたり、フォークは、その爪をあらわす。それに反して、箸^{はし}はめでたき瑞鳥^{ずいちよう}たる鶴^{くちばし}の嘴をあらわしているがゆえに一と。

ところが、このような御卓説が、今日でも生きているらしく、西洋人は肉食人種的であり、日本人は草食人種的であるからという所説が、相変わらず天下を通行しているようです。もっとも、この種類の印象批判的所論は、日本人の肉食率の増大にともなうやがて通用しなくなることでしょうが。しかも、これがおきまりのように、キリスト教と結びつけられて、文明批評で終らずに、宗教評論に短絡されて行くのですから、日本の文筆家の筆先はオールマイティです。

(1) 鯖田豊之の「肉食の思想」

たとえば鯖田豊之の「ヨーロッパ精神の再発見」という副題をもつ著書「肉食の思想」は、

いずれにせよ、ヨーロッパの社会意識には、たえず、階層意識がまつわりついてきた。食生活のうえで、パン食と肉食が主食、副食の別なしにむすびついたのとまったく同じである。社会意識と階層意識は、いずれが主でいずれが副ということもなく、お互いに固く手をにぎっているのである⁽¹⁾（「肉食の思想」）

と、奇妙な桶屋論法的類比論を展開したのち、一挙に「他宗を大いに誹謗せよ」というタイトルをかかげてキリスト教にこれを帰そうとして、実はみずから「他宗」であるキリスト教を、「大いに誹謗」しておられるのです。それこそタイトルを自作・自演しておられるかのように。曰く、

日本史のなかで強いてヨーロッパの宗教戦争に近いものをさがせば、十五、十六世紀の一向一揆であろうが、事情はまったくちがう。たとえば、当時、真宗（一向宗）教団の中心人物だった蓮如上人（1415-99）は、つぎのように信者をさとした。

^{そもそも}抑当流門徒中にをいて、この六ヶ條の篇目のむねをよく存知して、佛法を内心にふかく信じて、^{げそう}外相にそのいろをみせぬやうにふるまふべし。しかれば、このごろ当流念佛者において、わざと一流のすがたを他宗に対してこれをあらはすこと、もてのほかのあやまりなり。所詮、向後この題目の次第をまもりて、佛法をば修行すべし。もしこのむねをそむかんともがらは、ながく門徒中の一列たるべからざるものなり。

(1) 鯖田豊之著「肉食の思想・ヨーロッパ精神の再発見」（中央公論社）139-140頁。

- 一．神社をかりしむることあるべからず。
 - 一．諸佛菩薩ならびに諸堂をかりしむべからず。
 - 一．諸宗諸法を誹謗すべからず。
 - 一．守護地頭を疎略にすべからず。
 - 一．国の佛法の次第非議たるあひだ、
 - 一．当流にたつところの他方信心をば内心にふかく決定すべし。
- (笠原一男『真宗における異端の系譜』)

ここでいわれるようなことを逆にひっくり返したのが、ヨーロッパの場合である。キリスト教の諸宗派は、それぞれ「外相にいろをみせる」、「わざと一流のすがたを他宗にあらわす」、「神社をかりしむ」、「諸佛菩薩ならびに諸堂をかりしむ」、「諸宗諸法を誹謗する」ことに、大いに狂奔したことになる。これでは、はげしい対立・抗想のおこらないほうが不思議である。

だから、ザヴィエルも、日本に来てみて、佛教諸派がお互いに協調的なのにおどろいている。これは、日本人のあいだでは、ヨーロッパとちがって、異分子をむりやりに改宗させたり、それがだめなら抹殺したりするような強烈な社会意識がなかったからである。家族を越えた社会に対する関心が、そう根ぶかくなかったことの反映である。信仰の自由というより、むしろ、他人の信仰に対する「無関心」が支えになっているのである。……

これにくらべれば、ヨーロッパの場合は、あくまで異質的である。同じキリスト教の内部で、はげしい殺しあいがおこなわれたのである。すこしでもキリスト教に対する解釈のちがうのものは、お互いに、同格の人間でもなければ、同じ社会の成員でもなかった。断絶論理とむすびついた社会意識は、おそるべき威力を発揮する。ヨーロッパの食生活パターンは、ここまで影響するのである⁽²⁾（「肉食の思想」）

(2) 鯖田豊之著「肉食の思想・ヨーロッパ精神の再発見」（中央公論社）144-146頁。

もとより、この一文のキャラクリのほどは、あとで十分に告発させていただくこととして、ともかくも、この種の文化人的発言・日本尊しの攘夷的悪感情に接した場合、本質的な聖三位一体の唯一神を仰ぎ、厳正な聖書観に立脚する福音主義者は、どう応答をなして行くのでしょうか。そして、いわれるところの寛容・非寛容という問題をどうとらえていったらよいのでしょうか。特に、このような声を耳にすると、いつしか、私たちの中にひそんでいる美感が痛んでくるのを覚えるのです。おのれのみ高しとするのは美しくないのです。“我が佛貴し”と誇ることは、みにくいのです、（もとより、あとで述べるように、“正しいか・あやまりか”という、より重大な問題があるとしても）。

(2) 玉城康四郎の「ヨーロッパの佛教」

さて、先の鯖田氏の所論につづけて、二人ほどの日本人の悪感情を御披露申し上げて、あえてキリスト教徒の中にひそむ日本人に挑戦してみましょう。まず、東京大学インド哲学の玉城康四郎氏は、「ヨーロッパの佛教」と題する一文で、興奮を抑えながら次のような経験を録しておられます。

「佛教には十字架はない。それが佛教の一つのおおきな特徴であると思います。十字架はキリスト教にとってはなくてはならないものであり、しかもそれは単なる象徴ではなくて宗教の実体です。十字架を信じ、十字架を背負って真実のクリスチャンは活動しています。単なるシンボルではない。佛教には十字架がないということは佛教のはてしのない大らかさ、寛大さあるいはかぎりのない道の追求、菩薩の精神というものがうかがわれる。だが、また一面から見ると、キリスト教の十字架は非常にきびしいもので、十字架を背負い、十字架を信じながら実際の生活を生きている。だから十字架はキリスト教徒の肉体にまでなっているのです。

わたくしはカトリックの信仰の本質に少しでもふれてみたいと思い、八十才をこえた日本学者のグンデルト氏にたずねたところ、ボイロンという修道院を教えてくれたので、さっそく行ってみました。できれば一週間か十日そこにこもってカトリックの勉強をしてみたいと思ったのです。ところが、その神父さんと話をしていると、あまりにも、形式的に、またあまりにも独断的にキリスト教の教えを主張されることにびっくりして、ただ一晚だけとまってごめんこうむったのです。その時、その修道僧の一人のおじいさんが、私に、「この人をたずねてみなさい」とおしえてくれたので、私はある神父をたずねました。なるほどカトリックの信仰を非常に深くもっておられるかたで、日本の鎌倉の近くの修道院に十年ほどいたこともあるそうでした。その時に日本の石をたくさんもって帰って、大小さまざまな石で十字のキリストの顔をかたちづくっています。なかなか芸術的な感覚にゆたかなかたです。

その神父さんは、佛教はほんのわずかの真理をあらわしている。キリスト教は全面的に真理をあらわしているというふうなことから、佛教についてだんだん批判をしてきました。「いや、それはそうではない、実はこういう意味だ。」と私も話したのですが、やがてこの神父さんは憤然と立ちあがって、キリスト教のみが真実であることを強固に主張され、あげくのはては、今にも私につかみかかろうとする態度を示されるのです。そして「かくして十字軍は立ちあがったのだ、だからわれわれは異教徒を攻撃するのだ。」という。いかにも強固な信仰をおもちのようにお見受けしました⁽³⁾。

私は、これが活字になる以前に、講演そのものを、多くの聴衆にまじってお聞きしたのですが、お話の中に出て来た一老神父、日本から持ち

(3) 玉城康四郎著「ヨーロッパの佛教」《在家佛教》誌158号(昭和42年5月号)13-14頁。

帰った大小の石で十字のキリストの顔をかたちづくる芸術的センスも豊かな一老神父の福々しい顔が、いざひとたび、真理の問題・キリスト教の唯一性の問題となり、その唯一性がいわば《異教徒》に触れられるとなると、温顔にわか崩れ、態度は一変して、キリスト教の唯一性を強調したという、その憤然たる相貌が遠来の東洋紳士の眼にどれほど見にくい独断・独善の塊り、我執我見の虜と映じたことか、と思われて胸が痛んだものです。

（3）竹山道雄の「聖書とガス室」

また、もう一人、著名な評論家であられ、東洋・日本の立場、ひいては佛教的な立場から西洋批判に重厚な筆をふるい、あわせてキリスト教反対にも足を踏みこんでおられる竹山道雄氏は、その発表と同時にセンセーションを巻き起こした『聖書とガス室』なる一文において、ヨーロッパ、キリスト教を戯画化して評論しておられます。次のように、

第二次ヴァチカン宗教会議の第一読会がアメリカで催され、「カトリック教会の内部に、あたらしい自由化の気運が渦巻いていることがはっきり分った」（「タイム」四月五日）。

この記事によると、チュービンゲン大学のハンス・キュングという若い神父はヴァチカン宗教会議の少数の公的に選ばれた神学者の一人だが、この人の講演はつねに三千とか五千とかいう多くの聴衆を呼び、熱烈な喝采をうけた。その説くところによると、カトリックの権威主義とコミュニズムの独断主義のあいだに表面的な類似があり、現在でも教会内で「宗教審問と反自由の精神が絶えてはいない」。本来カトリシズムは自由な社会であるのだが、それがしばしば十分に実現されていないから、絶えざる努力によってこれを獲得しなくてはならない。そのために、とキュング神父は論じた一。

教会はすべての人におのおのその望むところを崇拜する権利を認め

るべきであり、この原理をスペインのような国で実現せしめなくてはならぬ（スペインはカトリックが国教で他教を許さないから）。……

各人はおのおの自分の信念をもつことができる—このわれわれにとっては自明なことが、キリスト教徒にとってはなかなか自明のことではなく、キュング神父の唱えたことは、ずいぶん大胆なことであるらしい。これが非常な共鳴を呼んだというのは、おそらくこういう気持がすでに人々の中に十分にあるのだが、それを思いきって言う人がなかったということかと思われる。

ゴッドは万物の創造者である。故に、それを奉ずるキリスト教のみが唯一の真正の宗教であり、諸宗教の一つではない。他はことごとくに^{にせもの}贗物であり、他の宗教の超越者に対する関係の仕方はあやまりである—こういう考え方が多くのキリスト教徒の骨身にしみこんでいるように思われる。

そういう考え方を示すものはいくらかもあるが、いま手近かのものから三つを拾ってみよう。『芸術新潮』二月号に、カルペンティールというカトリックの神父が感想を書いている。この人は、日本で方々の教会の壁画をえがいている芸術家の伝道者である。

「……宗教芸術の根源をなすものは宗教感情である。故に、たとえ間違いにせよ、ある人が真の神と思っているものとの関係にしても、真の神（キリスト）との関係と同じように深まるものだ。だから、仏教徒や物神崇拜^{フェティシスト}も、カトリック信者と同様の深い宗教感情をもてるし、エジプト彫刻にせよ、インカの絵画にせよ、菩薩像にせよ、カトリック寺院にあるロマネスク期のキリスト像と同じく深く宗教感情を示すことができる。しかし、大きな芸術的飛躍をひき起こした宗教は、それゆえに真の宗教であるとは、まだいえないだろう」。

つまり、カトリック以外の宗教はみなまちがっているのだが、その芸術はやはり宗教感情の表現ではあるのだから、それで真理による芸術と似たようなものができる、というのである。

もし日本人の僧侶がカトリック国に行って、「佛教以外の宗教はみなまちがっているのだが、カトリック信者や物神崇拜者も、^{フェティシスト}佛教徒と同様に深い宗教感情をもてるし……やはり真理による芸術と似たようなものができる」と言ったら、それがひき起す憤激は想像にあまりがある。カルペンティール神父も隣人の愛を説くにちがいないが、その人間の愛もやはり真の宗教たるキリスト教によるものでなくてはならず、佛教の慈悲や儒教の仁は物神崇拜者と同じ段階の贗物である、というわけなのだろう。そして、私の接したところでは、ヨーロッパ人は(ことにその教養の低い人々は)、おおむねまだこういう考え方をしている。カルペンティール神父はそれをただ素直無遠慮にのべただけなのだろう。

キリスト教側の無礼・不遜な暴言のほどは如何、と問われるようです。なお、つづけて次の論旨も御紹介しましょう。

この四月に教皇ヨハネス二十三世が回勅を発した。それは「地上の平和」と題して、ただカトリック教徒にだけではなく、「すべての善意の人々」にむかって呼びかけたもので、自然法と理性に訴えて、世界に平和を築こうとするのである。その説くところは、人権を重んじ、すべての個人は良心にしたがって神を崇める権利がある。真理を自由に探求する権利と共に、それを深く求めて身につけている義務がある。また、政府は少数者の権利を護らねばならず、一切の民族主義や植民地主義をすべて、軍備撤廃につとむべきである。さらに、現代では科学や技術が世界を一家族にし、経済は相互依存になったのであるから、世界的な力をもった共通の権威が普遍的な福祉を具体的に追求すべきであり、それには国連が母胎となるべきである、云々とのべている。すべて一々普遍的な人間の良心に呼びかけた言葉で、われわれにもよく分るし、そのとおりだと思う。

ただし、この回勅の終りにつぎのような意味の断言がしてある。「さらにもう一つの必要なものがある。すなわち、人間各人の間に平和がなければ、すなわち各人がゴッドが望む秩序を内心に築くのでなければ、人類に平和はありえない」。つまり、キリスト教のゴッドの命に従うときにのみ平和は来りうるというのである。それならば、キリスト教徒でないものは、自然法と理性を欠き、平和建設には参加する資格がない……？もし他宗教の人間も「善意の人」でありうることを認めるなら、回勅はこの点で矛盾しているのではないだろうか⁽⁴⁾？

以上は竹山道雄氏のジワジワと迫って来るようなキリスト教批判・ないし侮蔑の文章ですが、同氏はやがて一気に筆をのばして、いわゆる布教インペリアリズム、ユダヤ人問題、ナチスのガス室へと連絡・展開して行かれるのであり、創造や最後の審判、十戒の第一戒や第二戒といった教義を前述の現実批判の延長において、いや、その原因・源泉・元兇として弾劾^{だんがい}されるのです。これらの悪感情を浴び^あて、キリスト教徒たるものは、みずからの優越性主張の態度の足もとを見つめさせられ、寛容、非寛容の問題をあらためて考えさせられることでしょう。

第2章 佛典と聖書の《寛容》論

さて、《寛容》特に理論上の寛容ということですが、以上三氏の文章を一読して私の胸中によみがえって来たのは、佛陀の姿でした。あの佛陀の《無論争》の境地でした。佛陀・釈迦牟尼^{しやくかに}は、真に悟った者は、「わが説は真理なり」とみずから主張することもなく、「汝の説は虚妄なり」と相手を論難して争うこともない「無論争の境地 avivādabhūmi を安穩なりと観ずる」ことを説いていたのです。

(4) 竹山道雄著「聖書とガス室」《人間について》(新潮社)所載 9-13頁。

(1) 佛陀のことは《スッタ・ニパータ》

今、佛陀の教説を、もっともありのままに伝えていると言われる佛典《スッタ・ニパータ（経集）》から見てみましょう。

世間で人が勝^{すぐ}れているとみなすものを「最上のもの」であると考えて、諸々の見解にとどこおり、それよりも他のものはすべて「劣っている」と説く。それ故にかれは諸々の論争^{ごんじょう}を超えることがない（796）。

かれは、見たこと・学^{まな}んだこと・戒律や道德・思索したことについて、自身のうちにすぐれた実^{みの}りを見、それだけを執著して、それ以外のものをすべて劣ったものであると見なす（797）。

ひとが或るものに依拠してその他のものは劣ったものであると見なすならば、そのものは実にこだわりである、と真理に達した人々は語る。それ故に修行僧は、見たこと、学^{まな}んだこと、思索したこと、または戒律や道德に依拠してはならない（798）。

かれらは「このみ清らかである」と言い張って、他の諸々の教えは清らかでない^いと説く。自分が基づいているもののみ善であると説きながら、それぞれ別々の真理を固執している（824）。

かれらは論議を欲し、集会に突入し、相互に他人を愚者であると烙印^{らくいん}し、他人（師など）をかさに着て、論争^{かかわ}を交す。—自分が賞讃されるようにと望んで、みずから真理に達した者であると称しながら（825）。

集会の中で論争に参加した者は、賞讃されようと欲して懸念する。そうして敗北してはうちしおれ、（論敵の）欠点を探しているのに、（他人から）論難されると怒る（826）。

諸々の審判者がかれの所論に対し「汝は敗北した。論破せられた」というと、論争に敗北した者は悲泣して愁い、「かれはわたしを凌駕^{りょうが}した」といって悲嘆する（827）。

(特殊な) 哲学的見解を保持して論争し、「これのみが真理である」と言う人々があるならば、汝はかれらに言え、——「論争が起っても、汝と対論する者はここにいない」と (832)。

或る人々が「真理である、真実である」と言うところのその (見解) をば、他の人々が「虚偽である、虚妄である」と言う。このようにかれらは異なった執見をいだいて論争をする。何故に諸々の道の人は同一の事を語らないのであろうか? (883)。

反対者を愚者であるを見るとともに、自己を真理に達した人であるという。かれはみずから自己を真理に達した人であるという。かれはみずから自己を真理に達した人であると称しながら、他人を蔑視し、そのように語る (888)。

(学説の) 決定に立ってみずからよく量^{はか}りつつ、さらにかれは世の中で論争をなすに至る。一切の (哲学的) 断定を捨てたならば、人は世の中で確執を起すことがない (894)。

もし他人に非難されているが故に賤劣なのであるというならば、諸々の教えのうちで勝れたものは一つもないことになる。けだし世人はみな自己の説を固く主張して、他人の教えを劣ったものだと説いているからである (905)。

聖者はこの世で諸々の束縛^{そくばく}を捨て、論争が起ったときにも、一方にくみすることがない。かれは不安な人々のうちにあっても安らげく、泰然として、執することがない。—他の人々はそれに執著しているのだが。— (912)。

過去の汚れを捨てて、新しい汚れをつくることなく、欲におもむかず、執著して論ずることもない。賢者は諸々の見解を離脱して、世の中に汚されることなく、自分を責めることもない⁽⁵⁾ (913)。

(5) sutta-nipāta 中村 元訳「ブツダのことば」(岩波文庫) 149-167頁。

人はこれら佛説の中に、古代ギリシャ哲学のソフィストたち、たとえばプロタゴラスの《人間万物尺度論》を思い出したり、懷疑主義者ピュロンの《判断中止》にも似た言葉を見いだしたりされるでしょう。しかし、佛陀のそれは、ギリシャ的な理論的相対主義とか懷疑主義というよりも、もっと宗教的・倫理的な悟達の境地を旨とするものであって、むしろ、莊子の言う《蝸牛角上の争い⁽⁶⁾》や《朝三暮四⁽⁷⁾》風の果てしなき戯論^けに明け暮れていた当時の思想界を超然と眼下に見おろす高い境地を示すものであって、正に一服の清涼剤であり、沈黙の威力、佛陀の魅力ここにあり、というところでは、「(特殊な) 哲学的見解を保持して論争し、『これのみが真理である』と言う人々があるならば、汝はかれに言え、——『論争が起っても、汝と対論する者はここにいない』と」(832)などは、一刀一断、のちの禅問答に見うる禅機^{おういつ}汪溢^{うな}というところで、唸らざるを得ませんし、「反对者を愚者であるを見るとともに、自己を真理に達した人であるという。かれはみずから自己を真理に達した人であると称しながら、他人を蔑視し、そのように語る」(888)とは、寸言よく真理は真理でも宗教的真理のいかなるものなりやを、喝破しえたものと言うべく、筆者の推奨おくあたわざるところのものです。

ともかく、『『このみ清らかである』』と言い張って、他の諸々の教えは清らかでない^いと説く。自分がもとづいているもののみ善であると説きながら、それぞれ別々の真理を固執している」(824)とか、「論議を欲し、集会に突入し、相互に他人を愚者である^{らくいん}と烙印し、他人(師など)をかさに着て、論争^{かわ}を交す。——自分が賞讃されるようにと望んで、みずから真理に達した者であると称しながら」(825)と言った言葉は、先の三氏が槍玉にあげたキリスト教徒連を裏から照らし出しているように聞こえてくることでしょう……。

(6) 莊子・雑篇・則陽篇 第25。

(7) 莊子・内篇・斉物論篇 第2。

(2) キリストおよびパウロのことば

しかしながらです。ふりかえって、手もとの聖書を、今一度ひらいて見ると、このような無用の議論なすべからず、という教え、真理は真理でも宗教的真理は他人を蔑視したり、おのれを誇る増上慢心とは全く縁のないものであるという^{きょうじ}矜持は、佛典のみか聖書の教えるところなのであって、佛陀の語った限りは、聖書もまた同じく十分語っていたことを再発見するのです。たとえば使徒パウロは次のように語っていました。

何の益にもならず、聞いている人々を滅ぼすことになるような、ことばについての論争などしないように、神の御前できびしく命じなさいくテモテ第二 2：14)。

俗悪なむだ話を避けなさい。人々はそれによってますます不敬虔に深入りし、彼らの話は^{がん}癌のように広がるのですくテモテ第二 2：16, 17)

愚かで、無知な思弁を避けなさい。それが争いのもとであることは、あなたが知っているとおりにです。主のしもべが争ってはいけません。むしろ、すべての人に優しくし、よく教え、よく忍び、反対する人たちを柔和な心で訓戒しなさいくテモテ第二 2：23～25)。

果てしのない空想話と系図とに心を奪われたりしないように命じてください。そのようなものは、論議を引き起こすだけで、信仰による神の救いのご計画の実現をもたらすものではありません。この命令は、きよい心と正しい良心と偽りのない信仰とからで出て来る愛を、目標としています。ある人たちはこの目当てを見失い、わき道にそれて無益な議論に走り、律法の教師でありたいと望みながら、自分の言っていることも、また強く主張していることについても理解していませんくテモテ第一 1：4～7)。

私たちの主イエス・キリストの健全なことばと敬虔にかなう教えと

に同意しない人がいるなら、その人は高慢になっており、何一つ悟らず、疑いをかけたり、ことばの争いをしたりする病気にかかっているのです。そこから、ねたみ、争い、そしり、悪意の疑りが生じ、また、知性が腐ってしまって真理を失った人々、すなわち敬虔を利得の手段と考えている人たちの間には、絶え間のない紛争が生じるのです。しかし、満ち足りる心を伴う敬虔こそ、大きな利益を受ける道です（テモテ第一6：3～6）。

俗悪なむだ話、また、まちがって『靈知』と呼ばれる反対論を避けなさい。これを公然と主張したある人たちは、信仰からはずれてしまいました（テモテ第一6：20,21）。

すべての点で自分自身が良いわざの模範となり、教えにおいては純正で、威厳を保ち、非難すべきところのない、健全なことばを用いなさい。そうすれば、敵対する者も、私たちについて、何も悪いことが言えなくなって、恥じ入ることになるでしょう（テトス2：7,8）。

愚かな議論、系図、口論、律法についての論争などを避けなさい。それらは無益で、むだなものです（テトス3：9）。

等々と。いかがでしょうか、これはスッタ・ニパータからの引用ではないか？と思われる言葉ではありませんか。自説をゴリ押しして紛争を巻き起こしたり、敬虔さを踏みにじって論争をこととせず、むしろ、反対論を「避けなさい」とも言っているのです。まさに「論争が起っても、汝と対論する者はここにいない」です。しかも、注意していただきたいのは、これらが、いずれも稀代の論争家と目されているパウロの言葉だと言うことです。こうした点を考えてみると、パウロの《論争家像》は大いに修正されなければならないでしょう。彼は、“いわゆる論争家”ではなかったのです。

それに、「俺が、俺が」と言った論議の見にくさと、それに対するイエスの糾弾の痛烈さとは、あの最後の晩餐の席上において活人画のように

描き出されていました。

彼らの間には、この中でだれが一番偉いだろうかという論議も起こった。すると、イエスは彼らに言われた。「異邦人の王たちは人々を支配し、また人々の上に権威を持つ者は守護者と呼ばれています。だが、あなたがたは、それではいけません。あなたがたの間で一番偉い人は一番年の若い者のようにになりなさい。また治める人は仕える人のようでありなさい〈ルカ22：24～26〉。

そして、なかならず無用・無益な議論に対する沈黙の威力のほどは、かの王ヘロデを前にして、ついに一言も語らず、総督ピラトの前でも全く沈黙を守られた主イエスにあらわれています。

ヘロデはイエスを見ると非常に喜んだ。ずっと前からイエスのことを聞いていたので、イエスに会いたいと思っていたし、イエスの行なう何かの奇蹟を見たいと考えていたからである。それで、いろいろと質問したが、イエスは彼に何もお答えにならなかった。祭司長たちと律法学者たちは立って、イエスを激しく訴えていた〈ルカ23：8～10〉。

ピラトはイエスに尋ねた。「あなたは、ユダヤ人の王ですか。」イエスは答えて言われた。「そのとおりです。」そこで、祭司長たちはイエスをきびしく訴えた。ピラトはもう一度イエスに尋ねて言った。「何も答えないのですか。見なさい。彼らはいかにあなたを訴えているのです。」それでも、イエスは何もお答えにならなかった。それにはピラトも驚いた〈マルコ15：2～5〉。

俗に「^{ゆいま}維摩の一點百雷の如し」と言われますが、「イエスの一點萬雷の如し」と申しましょうか。

また、パウロは人間の個々の知識・意見・学説に対しても、佛陀に劣らずこれを相対視しています。

知識は人を高ぶらせ、愛は人の徳を建てます。人がもし、何かを知っていると思ったら、その人はまだ知らなければならないほどのことも知ってはいないのです。しかし、人が神を愛するなら、その人は神に知られているのです（コリント第一8：1～3）。

卑小な人間の知識、人の知るということが、逆に神に知られるという、巨大な神の知識の前に、いかに相対化され、極小化されていることでしょうか、こうして、^{しょうまつせつ}枝葉末節を争って得々とする人間の知者・論者をひとまとめにするや、エイヤッとばかりに投げ捨てるのが次の言葉です。

知者はどこにいるのですか。学者はどこにいるのですか。この世の議論家はどこにいるのですか。神はこの世の知恵を愚かなものにされたではありませんか。……神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです（コリント第一1：20）。

ああ、神の知恵と知識との富は、何と底しれず深いことでしょう。そのさばきは、何と知り尽くしがたく、その道は、何と測り知りがたいことでしょう。なぜなら、だれが主のみこころを知ったのですか。また、だれが主のご計画にあずかったのですか（ローマ11：33,34）。

このような発言が、旧約聖書の「箴言」中にもちりばめられていることは申すまでもありません。そして、知識よりも、より豊潤にして大事な世界があることを語って歌のごときは、あの有名はコリント人への第一の手紙13章の《愛の賛歌》です。

たとい、私が人の異言や、御使いの異言で話しても、愛がないなら、やかましいどらや、うるさいシンバルと同じです。また、たとい私が預言の賜物を持っており、またあらゆる奥義とあらゆる知識とに通じ、また山を動かすほどの完全な信仰を持っていても、愛がないなら、何の値うちもありません。……預言の賜物ならばすたれます。異言ならばやみます。知識ならばすたれます。というのは、私たちの知っているところは一部分であり、預言することも一部分だからです。完全なものが現われたり、不完全なものはすたれます。……今、私は一部分しか知りませんが、その時には、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知るようになります。こういうわけで、いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているのは愛です。コリント第一13：1～13)。

哲学の世界においては王座を占めるであろう知識も、宗教の世界においては畢竟^{ひっきょう}愛の従者^{わきじ}の地位に甘んじなければなりません。キリスト教においては、

あなたがたの愛が真の知識とあらゆる識別力によって、いよいよ豊かになり、あなたがたが、真にすぐれたものを見分けることができるようになりますように(ピリピ1：9,10)。

として、知識は知恵と共に《愛》という花を咲かせるための肥料に供せられるものだったのです。

ともかくも、個々の人間の知識や意見を絶対視することから生ずる論争や対抗は、いまわしいものとして否定されているのです。スッタ・ニパータの境地は聖書の境地に内包されていたのです。

あれこれの神父や教徒や集団や民族が、どうだからと言って、聖書そ

のもの、キリスト教そのものまでが、いかにも知に勝って、蝸牛角上の論争をこととするものであり、宗教において最も大切な敬虔や愛を踏み^{すさ}にじってまでも他者を誹謗・嘲罵する荒んだ猛獣であるかのように描かれることは正しくないのです。このことは、まず評価していただかなければなりません。

いや、もう少し聖書から引用して、今日、故意にも常識化されようとしている謬見の蒙^{ひら}を啓いておきましょう。

私はだれに対しても自由ですが、より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隷となりました。ユダヤ人にはユダヤ人のようになりました。それはユダヤ人を獲得するためです。律法の下にある人々には、私自身は律法の下にはいませんが、律法の下にある者のようになりました。それは律法の下にある人々を獲得するためです。律法を持たない人々に対しては、——私は神の律法の外にある者ではなく、キリストの律法を守る者ですが——律法を持たない者のようになりました。それは律法を持たない人々を獲得するためです。弱い人々には、弱い者になりました。弱い人々を獲得するためです。すべての人に、すべてのものとなりました。それは、何とかして、幾人かでも救うためです。私はすべてのことを、福音のためにしています。それは、私も福音の恵みをとともに受ける者となるためなのです（コリント第一 9：19～23）。

ここには、おのれを粉碎し、低くし、無にしてでも、他者に同化する柔軟さが、すすめられ、宣言されこそすれ、^{ほうじゃくぶじん}傍若無人に自説を高言して、押しつける調子は、いささかも見えないのです。方円の器にしたがう水のごとく、あるいは、周囲の色彩になじみ、郷に入っては郷に従うという真理宣教のためには相手に同じて行く“カメレオニズム”と申してもよいでしょうか。

それに、この使徒パウロが主と仰いだイエス・キリストは、いわゆる異教退治・邪教征伐的な弟子たちの態度を厳に戒められているのです。

サマリヤ人はイエスを受け入れなかった。弟子のヤコブとヨハネが、これを見て言った。『主よ。私たちが天から火を呼び下して、彼らを焼き滅ぼしましょうか。』しかし、イエスは振り向いて、彼らを戒められた〈ルカ9：52～55〉。

という風に。むしろ悪しき者がいたとしても、これを酷烈に処刑するよりも、終りの時まで共存させておく方がよいという譬話も話しておられたのです。

ある人が自分の畑に良い種を蒔いた。ところが、人々の眠っている間に、彼の敵が来て麦の中に毒麦を蒔いて行った。麦が芽ばえ、やがて実ったとき、毒麦も現われた。それで、その家の主人のしもべたちが来て言った。「ご主人。畑には良い麦を蒔かれたのではありませんか。どうして毒麦が出たのでしょうか。」主人は言った。「敵のやったことです。」すると、しもべたちは言った。「では、私たちが行ってそれを抜き集めましょうか。」だが、主人は言った。「いやいや。毒麦を抜き集めるうちに、麦もいっしょに抜き取るかもしれない。だから、収穫まで、両方とも育つままにしておきなさい〈マタイ13：24～30〉。

これをヘンリー・カメンの言葉を借用しますと、「キリスト自身がこの譬を説明したところによると、それは最後の審判のときまで善人と悪人は共存をゆるさるべきだとの意味であった。のちになって、これに与えられた共通の解釈は、教会はキリストの再び来り給う日まで、教会内の正道をふみ外した者たちに対して寛容であるべきだ、というものであった。もっと後になると、この解釈はさらに拡大されて、キリスト者は、

同信の集団に属さない人々に対しても寛容でなければならぬ、という意味にとられるようになった。いずれにせよ、死刑のような極端な手段が異端者もしくは異教徒に対して講ぜらるべきでないことは明らかであった」のです（「寛容思想の系譜⁽⁸⁾」）。

ともかくも、先にあげた《誰が一番偉いか》といった弟子たちの議論においても一なんと彼ら弟子たちは、最後の晩餐直前でもこの議論をやっていました〈ルカ9：46～48〉一、また不信のサマリヤの町を焼き滅ぼしてしまおうと、腕をまくった弟子のヤコブとヨハネの態度にしても、主イエスの心をへだたること遥かなるものであって、この主イエス・キリストと弟子たちとの間の落差が、のちにキリストと個々の教徒や個々の教会との落差としてつづいていったとすれば、後者の現象を例にとって即時的にキリストを、聖書を、キリスト教そのものを合わせ斬らんとする議論は、杜撰ずさんの烙印らくいんを押さるべきでしょう。そして、キリスト教徒や教会は、キリストに、あるいはパウロにかな叶わざるところあれば、ありのままに反省し、改めることにおいて大胆率直でなければなりません。聖書は中途半端な批判者を責めるのみか、キリスト教徒や教会をこそ、最もきびしく審判しているものなのです。聖書の一層の精読が自他ともにすすめられる次第です。

ちなみに中国文学専攻の学徒から作家に転じた高橋和巳が作中の人物の口をかりて吐き出した『邪宗門』の一節を加えておきましょう。

「さらにキリスト教会の方々に申す。かつて岡倉天心の歎けるごとく、キリスト教徒はここ三百年ばかりのヨーロッパ社会の先進性の威をかりて、自らを押しつけることのみ巧みにして、他から学ぶ態度にとぼしき

(8) H・カメン「寛容思想の系譜」(成瀬 治訳・平凡社) 29頁。

を我らもまた遺憾とす。近代文明、資本主義形成も、プロテスタンティズムの精神ありてのみ可能なりとの学説も、他ならぬこの日本の発展によりて反証さる。我らはキリスト教を認めざるには非ず。その歴史上に果せる光輝ある役割、その功罪も、宗教人たるゆえに人並み以上に知れるものなり。もし汝ら、我らが汝らに学べるその十分の一たりとも、我らのことを知り研究をつみて批判するならば、喜びてその長を取らん。されどその言説の中に、我らの事どもを同じ人間の業として、真摯に研究せる痕跡だになし。言葉ことなりて知らざるは許さん。されど邦人牧師は日本人にして日本語を話し書く者。わずかの努力もて我らの教義を知りうべし。かつて、室町時代、単身この土地に布教にきたれるキリシタン宣教師たちすら、懸命に日本のことを知らんと努力せり。イルマン・不干斎ハビアンの著『妙貞問答』の一書にても、仏教との論争に、すくなくとも仏教の根本義を認識しての上に批判を展開せること明らかなり。さらには明治人植村正久はキリスト教徒なるゆえに、法然の秀れたるを認め、新渡戸稲造はキリスト教徒でありつつ、また日本武士道の美を海外に伝えたり。にもかかわらず、より発展せる昭和の時代において、あたかも自主性なき植民地の奴隷のごとく、自らの身辺のことも知らずして、ただ自らと異なるゆえに我らを邪教徒と罵るは何事ぞ。……思うに文明は世界を単一化しゆかんも、文化は多様にてあるべきもの。油絵に養われたる美意識は、淡彩の画の美にも感応し、琴の音に感動しうる耳はヴァイオリンの美にも敏感なるべし。一つの美は他の美を否定せず。芸術は宗教の母。そしてまた子。芸術においてありうることの、何とて宗教にありえざらんや。郷に入らば郷に従うが礼儀なるも、もし、我ら頭を屈して礼する時、汝らの握手せんと欲するならば、我らもまた喜びて手をさしのべん」⁽⁹⁾

(9) 高橋和巳著「邪宗門」第14章「四面楚歌」。高橋和巳作品集（河出書房）〈4〉134-136頁。

京都大学文学部講師としてではなく、一作家としての、うちわった率直な感情が出されています。そして、キリスト教会、日本のキリスト教会の思いあがり、アクセントをつけて描き出されています。

(二) に続く